

研究ノート

総合的な学習の時間と学校裁量の時間を活用した
新設小・中学校の未来志向型教育の試み

—茶道教育を通じた徳性と品格の涵養—

嶋内麻佐子¹⁾, 橋本信博²⁾, 柳井駿平³⁾
橋本健夫¹⁾

(1)人間社会学部、2)九州文化学園小・中学校、3)人間社会学部)

Future-oriented education in new elementary
and junior high schools in integrated studies
and school discretionary studies

—cultivating moral nature and dignity through tea ceremony education—

Masako SHIMAUCHI¹⁾, Nobuhiro HASHIMOTO²⁾, Shunpei YANAI³⁾
and Tateo HASHIMOTO¹⁾(1)Faculty of Human and Social Studies, 2)Kyushu Bunka Elementary School/Junior High School,
3)student affairs office)**Abstract**

The elementary and junior high schools of the Kyushu Bunka Academy (hereafter referred to as the school) was opened in 2019. The founding spirit of the school is the cultivation of excellent moral nature and dignity. The school's aim is to foster the spirit through integrated studies and discretionary school studies.

The curriculum is based on “promotion of English education,” “promotion of IT education,” and “promotion of Japanese culture education”. Especially in the promotion of Japanese culture education, the school has been working to enhance tea ceremony education with the cooperation of Nagasaki International University faculty.

A survey was conducted by Nagasaki International University to reveal the effect of tea ceremony education. The result reveals that many children and students look forward to the tea ceremony and come to think about the feelings of others in daily life.

After a year and a half of practice, the teachers feel that moral character in the children and students has developed, but at this point in time, qualitative analysis is still being conducted. In the future, we are planning to start a quantitative analysis to clarify how children and students have been changed by learning the tea ceremony in order to concretely reveal the results of our school's education.

Key words

Integrated Studies, available classes of school, virtuous and dignified students, school curriculum

要旨

2019年に開校した学校法人九州文化学園の小・中学校（以降、本校とする）は、総合的な学習の時間と学校裁

量の時間を活用して建学の精神である優れた徳性と品格の育成の基盤構築を行おうとしている。このために、「英語教育の推進」、「IT教育の推進」及び「日本文化教育の推進」の3つの学びを学校教育の柱に位置付けたカリキュラムを編成し、実践を行っている。特に、日本文化教育の推進においては、同学園の長崎国際大学教職員の協力も得て茶道教育の充実を図ってきた。

全児童・生徒を対象とした長崎国際大学の調査によれば、茶道の時間を楽しみにしていることや、日常生活においても相手の気持ちを考えるようになったことが明らかになっている。開設後1年半の実践を通して、児童・生徒の徳性の育成については、教員も手ごたえを感じているが、現時点では定性的な判断が先行している。今後、茶道教育を中心とした学びによって、児童・生徒たちがどのように変容したかを定量的に明らかにする研究にも着手し、本校の教育の成果を具体的に明らかにしようと考えている。

キーワード

総合的な学習の時間、学校裁量の時間、徳性と品格の育成、カリキュラム編成

1. はじめに

「総合的な学習の時間」は、平成8年7月の中央教育審議会答申（21世紀を展望した我が国の教育の在り方について）が、生きる力育成のための横断的・総合的な指導を行う一定のまとまった時間を創設すべきであると提案したことを受け、平成10年の学校教育施行規則の改正によって誕生した¹⁾。

平成20年に改訂された学習指導要領では、総則、各教科、道徳、特別活動と並んで「総合的な学習の時間」の1章が設けられ、各教科等と同様に、第1項が目標、第2項が各学校において定める目標及び内容、そして、第3項が指導計画の作成と内容の取扱いが示された²⁾。

「総合的な学習の時間」の開設以降、その評価が高まる中で、平成29年3月に学習指導要領の改訂が行われた。これは、生産年齢人口の減少や技術革新に伴って社会構造等が大きく変化し、予測が困難な時代になりつつあるとの判断のもとでの教育を考えた結果であるとされている³⁾。この改訂の大きな特徴は次の3点である。

- 学びの地図としての学習指導要領
- カリキュラムマネジメントの実現
- 育成すべき資質・能力の明確化と主体的・対話的で深い学びの実現

また、この改訂においては、特別の教科として道徳が位置づけられ、総則に「道徳教育や体験活動、多様な表現や鑑賞の活動等を通して、豊かな心や創造性の涵養をめざした教育の充実を努めること」という目標が定められた。これに基づき、「よりよく

生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解をもとに、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」ことが、道徳の達成すべき目標とされた。これは、本校の建学の精神とも合致する。

そこで、大学教員の協力を得ることが容易な環境を考慮に入れて、カリキュラムマネジメントを行い、小・中・大連携のカリキュラムを構築した。

このカリキュラム編成においては、「茶道教育の充実によって、日常生活においても徳性と品格の芽生えが見られるようになる。」との仮説を立て、実践を行った。

2. 方法と結果

1) 3つの学びと本校のアイデンティティ

学園の建学の精神は、「高い知性と豊かな教養」、「優れた徳性と品格」、「たくましい意志と健康な身体」を備えた人の育成である。また、教育理念として「明日への飛躍～夢・憧れのために学び、志のために学ぶ」を掲げ、これらの精神に沿って、次の3つの教育方針を掲げている。

- (1) 英語教育の推進
- (2) IT教育の推進
- (3) 日本文化教育の推進

その柱の1つ、日本文化教育では、茶道教育を中心とした道徳教育を実践している。

様々な文化や価値観が混ざり合うグローバル化社

会で生き抜くためには、異文化理解の基礎となる自国文化の理解が大切である。本校では、次の3点を目標に、平戸松浦家に伝わる武家茶道「鎮真流」を中核に据え、「思いやりの心」を育む学びを重視している。

- (1) 自国の文化への理解を基盤として、異文化を理解し、尊重する姿勢を育てる。
- (2) 身近なものとして茶道に触れ、優れた徳性と品格を身に付ける学びを实践する。
- (3) 茶室という特別な空間等を利用し、相手に対する「気遣いの心」「思いやりの心」を育む。

2) 茶道教育のカリキュラム

本校は、毎月奇数土曜日が午前中4時間の授業日である。また、3学期制で、1学期は7月31日を終業式とし、夏季休業日は8月の1か月としている。

授業日数は、市内の小学校、中学校と比べて31日程度多くなり、毎日の基本日課も本校は小中共に6時間授業である。この方針によって、豊かな学びを支えるための授業時数は十分確保できている。具体的に、図1～図3に示す。

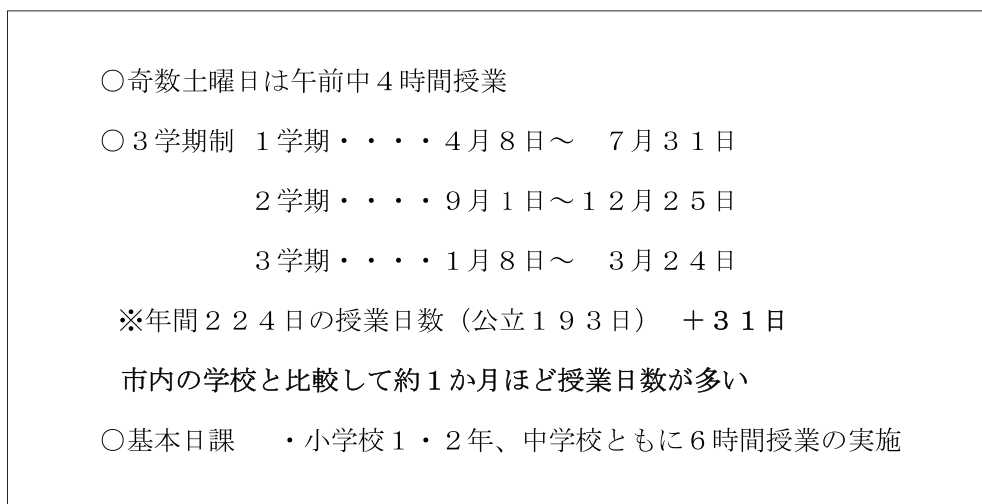


図1 授業時数の確保

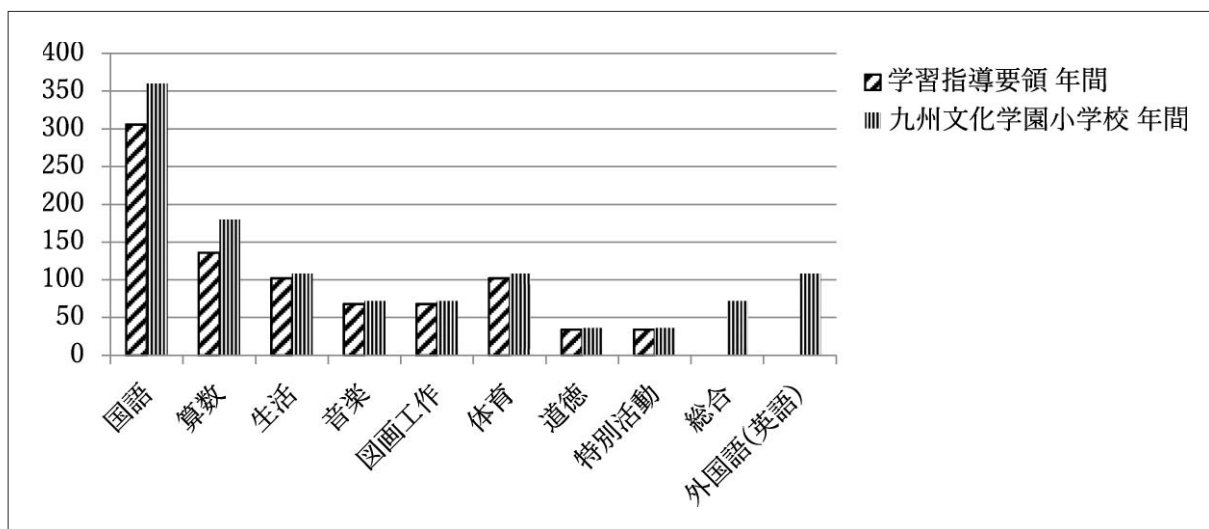


図2 各教科等の時間数 (小学校1～2年生)

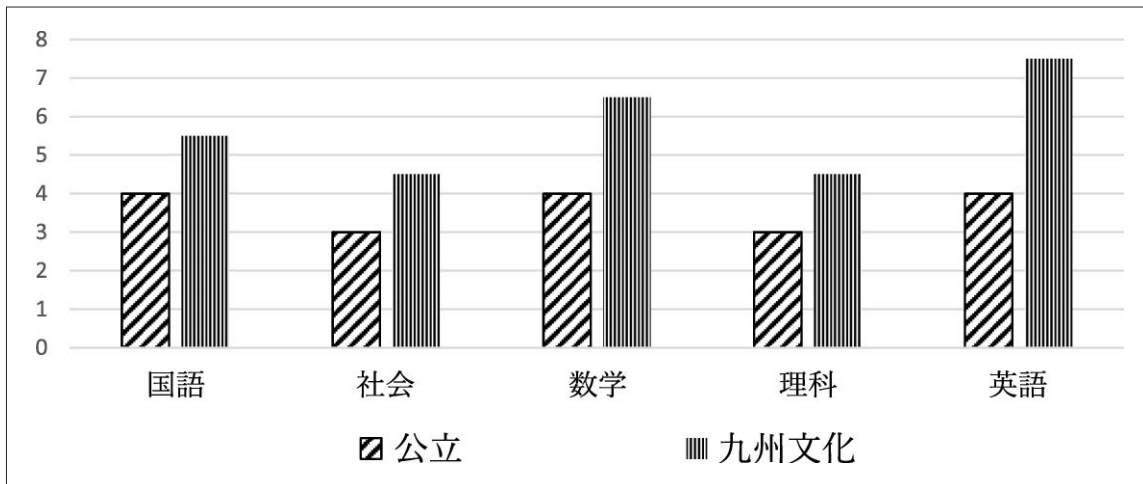


図3 各教科の週時間数 (中学校)

小学校、中学校それぞれに茶道の授業は週に1時間を設け、大学の教職員を中心に小・中学校教員も指導にあたった。初年度であるため、授業内容につ

いては児童・生徒の理解度や興味関心の度合いに合わせてながら、柔軟に行った。

表1 茶道教育カリキュラム (一部)

| 日付 | 回 | 内容 | 備考 | |
|------|---|----|---|---|
| 4/11 | ① | 小 | オリエンテーション、茶室でのマナー | ・茶室でのマナー、禅語、花、全てにおいて発問を行った。 |
| | | 中 | オリエンテーション、茶室でのマナー、礼法 | ・礼法指導は全体で行った。 |
| 4/18 | ② | 小 | 茶室でのマナー (復習)、礼法 (双手礼・爪甲礼)、茶室の説明 | ・双手礼・爪甲礼を中心に指導。 |
| | | 中 | 礼法 (双手礼・爪甲礼・立礼) の復習、礼法 (立ち座り方・歩き方)、入退室の仕方 | ・歩き方は未実施。 |
| 4/25 | ③ | 小 | 茶室でのマナー (復習)、礼法 (立ち座り方・歩き方) | ・歩き方を何度も繰り返し実施。 |
| | | 中 | 礼法 (双手礼・爪甲礼・立礼・立ち座り方) の復習、礼法 (歩き方) | ・立ち座りの復習で足の動きを深く教えたことにより、退席時に意識して行うようになった。 |
| 5/9 | ④ | 小 | 茶室でのマナー (復習)、礼法の復習 | ・礼法の復習を中心にを行い、双手礼や爪甲礼の指導を徹底して実施。 |
| | | 中 | 礼法の総復習、お菓子の取り方 | ・お菓子の取り方を実物の干菓子を用いて、食べるころまで実施。 ・退席の際には、待機している生徒に歩き方を実施させた。 |
| 5/23 | ⑤ | 小 | 茶室でのマナー (復習)、礼法の総復習、道具の名称 | ・道具の名称の後に礼法の復習を行ったため、釜移動に時間がかかり、その合間に児童が乱れた。 |
| | | 中 | 服紗セットの説明、道具の名称と扱い方 | ・小学生とは異なり、道具の意味やどのような使い方をするのか、注意点をより深く説明した。 |
| 5/30 | ⑥ | 小 | 道具の名称 (総復習)、礼法の復習 | ・グループ別で道具の名称 (茶碗、棗、茶杓、茶筌) について復習。 ・礼法の際に、児童の中から代表を選び、床の前で他の児童がしているところを見学させた。 |
| | | 中 | 道具の名称と扱い方の復習、お菓子の取り方 | ・今回からお菓子は模造品を使用。 |

授業は、席入り、課題の確認、客点前を中心とした課題の実践、禅語・花の解説、退席という流れである。年間を通したカリキュラムは、長崎国際大学茶道研究所の教授・講師陣に作成をお願いした（表1参照）。

3) 児童・生徒の授業への取り組み

小学校・中学校の授業、及び行事や校外での活動における児童の様子は次の通りである。

○小学校での授業



写真1 歩き方



写真4 お茶の出し方



写真5 お茶の飲み方



写真2 礼の仕方



写真6 お菓子をいただく



写真3 茶碗の持ち方

小学校では、礼法や客作法、茶室でのマナーを身に付けることから練習を始めた。回数を重ねるたびに上達し、お茶の出し方やいただき方等も練習するようになり、茶道の学習を楽しく取り組む姿が見られるようになった。

○中学校での授業



写真7 茶道の心得を学ぶ



写真11 お茶の出し方



写真8 茶匙の使い方



写真12 お菓子をいただく



写真9 柄杓の使い方



写真10 柄杓でお湯を入れる

○行事や校外での活動



写真13 茶道を学んでいる大学生による指導

中学校では、小学生と同様の内容に加えて茶碗や菓子器の出し方・下げ方、点て出しの仕方等、より具体的な作法を学習した。

中学生にとっても、ひとつひとつの所作、作法は難しいようであったが、授業を重ねるたびに上達していた。大学の先生方から時折、「大学の学生さんより上手です。」とお褒めの言葉をいただくこともあるほどであった。



写真14 大学の茶道大会への参加



写真15 平戸藩の茶室「閑雲亭」の茶会への参加

小学生、中学生共に、秋の学習発表会では、授業で身に付けたおもてなしの礼法や作法を実践発表することにより、学習の成果を示すことができた。この際は、大学の講師の先生方の他に、茶道文化を学んでいる学生の皆さんから小学生・中学生を指導していただいた。特に、中学生は夏休みのサマースクールで、茶道「鎮信流」の流祖について知るだけでなく、茶室「閑雲亭」にてお茶をいただく機会を通して、より一層本格的な学びを経験することができた。

4) 児童・生徒を対象とした調査

本来は、小・中学校で学修成果を見るために、項目を設定して調査すべきであるが、実践に追われて、調査することができなかった。そこで、長崎国際大学の茶道文化研究所が独自に調査を行い、報告された結果をお借りして述べることにする⁴⁾。

【小学校】

調査対象児童：小学生18名

○挨拶がきちんとできるか

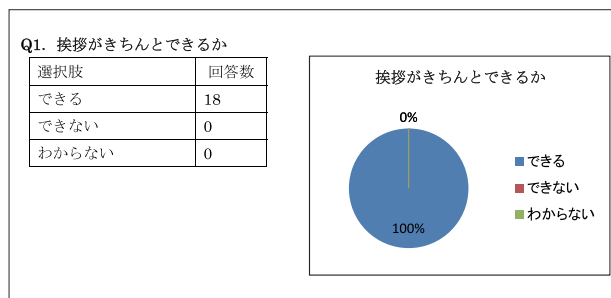


図4 挨拶の状況

図4に示すように、小学校では、「挨拶がきちんとできるか」という問いに対して、全児童が、挨拶はきちんとできると回答している。

○茶道の授業は楽しいか

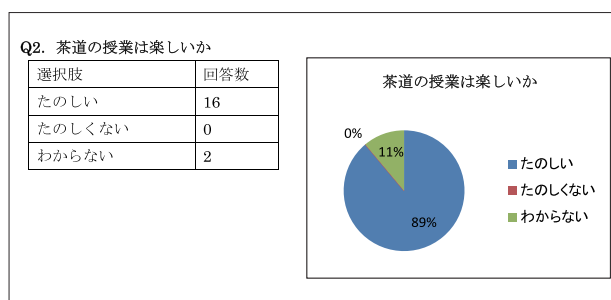


図5 茶道の授業に対する感想

図5に示すように、ほとんどの児童が「授業が楽しい」と答えている。

【中学校】

調査対象生徒：18名

○挨拶がきちんとできているか

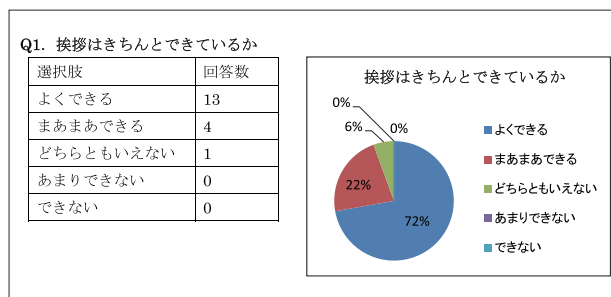


図6 挨拶の状況

図6に示すように、9割の生徒が肯定的に回答し

ている。

○茶道の授業は楽しいか

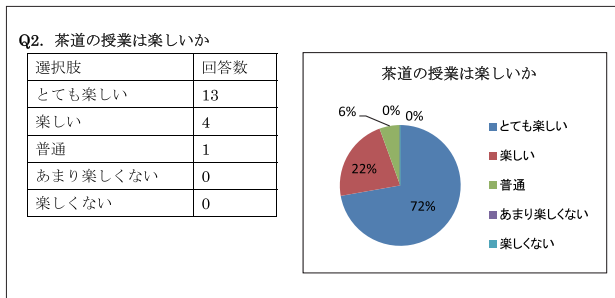


図7 茶道の授業に対する感想

図7に示すように、ほとんどの生徒が楽しいと答えている。

図5及び図7に示されたように、小学生も中学生も茶道の授業は楽しいと答えている、また、小学生も中学校生も挨拶は、進んでできているようである。

5) 児童・生徒の変容に関する教員の意見

小・中学校独自の調査はできなかったが、教員間での話し合いを行った結果、次のような意見でまとまった。

- 礼儀作法を重んじる態度が育ちつつある。
- 季節を感じ取る力が、育ちつつある。
- 自然や崇高なものを敬う心が、育ちつつある。
- 歴史文化に対する関心意欲が高くなりつつある。

上述の4)と5)の調査結果から、茶道の授業は児童・生徒に好感触で受け入れられており、当初の目標に近づきつつあると考えている。

3. 考 察

本校のアイデンティティを確立するために、茶道教育の実践を行ったが、児童・生徒は「茶道の授業を楽しい」と感じており、興味関心や充実感をもって取り組む姿勢が育ちつつあることが、調査や教員の話し合いの中で確認された。また、教員の耳には、お茶の授業中に用いられているお菓子や花を通して季節を感じようとする言葉が聞こえてきている。さらに、季節に合わせたお菓子を身近に感じることで、伝統の美しさにも気付きつつあるようであ

る。このような状況から、「茶道教育の充実によって、日常生活においても徳性と品格の芽生えが見られるようになる。」との仮説を立て、小・中・大連携のカリキュラムについて実践してきたが、一定の成果を得ることができたと考えている。

ただ、小・中学校独自の定量的な調査ができなかったことは大きな反省点である。児童・生徒の変容に関しては、何らかの既存の尺度を適用するか、若しくは、独自で尺度を作成するかによって、調査を行うことが求められている。これは、本校のアイデンティティを示すためには不可欠となる。

さらに、実践の今後の課題としては、学年及び児童・生徒数の増大を踏まえ、「探求する学び」を組み込んだ小中一貫（9年間）の茶道教育カリキュラムの構築・充実を図る必要があると考えている。

4. おわりに

総合的な学習の時間の醍醐味は、「目標」「内容」を各学校で設定できる点である。そうした意味で、九州文化学園小中学校の実践は、九州文化学園のリソースを生かした、本校でなければできない価値のある実践であると感じている。これはまさしくアイデンティティの確立であり、未来志向の教育でもある。

また、茶道を通し、日本文化に立脚した国際社会で活躍できる人の育成をすることは、堅実な国際理解教育であると感じている。さらに、茶道は、茶道が生まれた背景、茶道で大切にされる作法の根拠、茶道の道具の歴史や文化・種類、お茶の歴史や産地・種類など探究の課題も多数存在している。またその一つ一つが、日本文化を肯定的に理解していく上で価値のある課題であり、国際理解の基盤ともなる。

この実践をさらに充実させて、未来社会に羽ばたく子どもたちを育成していきたい。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省 (1998) : 学習指導要領
- 2) 文部科学省 (2008) : 学習指導要領
- 3) 文部科学省 (2017) : 学習指導要領
- 4) 長崎国際大学茶道文化 (2020) : 小・中学校校との比較による大学茶道文化教育の検討事項、学長裁量経費実施報告書, PP.1-28